



Title	力の不定用法の成立、再訪
Author(s)	衣畑, 智秀
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 87-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90791
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

力の不定用法の成立、再訪

一 はじめに

古代日本語でもつばら疑問文を標示するのに使われた力は、中世・近世に入り、名詞句の位置での用法を発達させた。衣畑・岩田(二〇一〇)では、名詞句位置での力の発達を調べ、一五世紀に選言が、一六―一七世紀に間接疑問文が、一九世紀に不定がそれぞれ発達したとしている。

しかし、間接疑問文で使われる力と選言・不定で使われる力の意味は異なるのに対し、選言と不定で使われる力には意味の違いがない。よって、力による間接疑問文の成立は選言・不定とは異なる意味が発生したことになるが、選言と不定の成立はそれぞれに力に意味変化が起こったことを意味しない。このことをまず、現代日本語の力の例から確認したい。

たとえば、次の(1)は、間接疑問解釈が優勢だが、選言解釈も可能であると思われる。

衣 畑 智 秀

(1) 私はウオッカを飲むか焼酎を飲むか考えていた。

間接疑問解釈とは、「ウオッカを飲むか焼酎を飲むか」の答えを考えていた、と読める解釈である。一方、選言解釈は答えを考えているわけではなく、話し手が考えていることがあった、のように、考える対象 x を存在量化する解釈である。そして選言はその x が「ウオッカを飲むこと」か「焼酎を飲むこと」かあるいは他のことかであったことを表している。この解釈は文を(2)のようにするとより明確になるが、(1)に曖昧性があることは、両者が異なる意味であることを示している。

(2) a 私はウオッカを飲むか焼酎を飲むか何か考えていた。

b 私はウオッカを飲むことが焼酎を飲むことを考えていた。

また同様に、(3)には間接疑問解釈と不定解釈が存在する。

(3) 何か考えていた。

間接疑問解釈はたとえば「飲みたいものが何か考えていた」の

ように答えを求める解釈であり、不定解釈は「考えていたことがあった」（が忘れてしまった）のように、考えていた対象を存在量化する解釈である。

このように、間接疑問と選言・不定は異なる意味であるのに対し、選言と不定の間には、意味の違いを反映する解釈の曖昧性が見られない。

(4) a あの男はウオッカが焼酎かを手にしていた。

b あの男はウオッカが何かを手にしていた。

c あの男は何かを手にしていた。

疑問詞ではない名詞句（以下「非疑問名詞句」）が並列される(4a)が選言の典型的な例、カが疑問詞を取る(4c)が不定の典型的な例だが、その中間的な(4b)を考えてみても、「選言解釈」と「不定解釈」で文が曖昧になる、ということはない。いずれも「手にしていたものxがあった」という存在量化を表し、その対象が不確定であることを、非疑問名詞句を並列させて表現するか、疑問詞で表現するかという形態統語的な違いではない。

以上、選言、不定は、同じ意味を表す二つの形態統語的手段であり、本稿ではこれらを「用法」の違いと捉え「選言用法」「不定用法」と呼ぶ。一方、意味的にはこれらは存在量化を不定的に示す点で共通しており、この共通の意味を「不定」とする。図示すると次のようになる。

図…「不定」の多義性

意味 形態統語

「不定」 不定用法・疑問名詞句を取る

「不定」 選言用法・非疑問名詞句を並列させる

このように、選言用法、不定用法のカは同じ意味「不定」を表すにもかかわらず、一方は一五世紀に出現し、もう一方は一九世紀と遅れて出現している。本稿では特にカの不定用法が遅れた点について、ゾ・ヤラの不定用法との関係や、カの他の用法との関係から、考察を行う。

二 不定用法のゾ・ヤラ

カが不定用法を持つようになる前に、ゾやヤラが不定用法を持っていたことがよく知られている。此島（一九六六、三三七～三八頁）は中世に入ってゾに不定の用法が見られるようになることを指摘し、近世に江戸語でカの不定用法も見られるようになるが、上方語ではカが少なく、代わりにヤラが用いられているとする（湯澤（一九五五）、湯澤（一九六二）も参照）。また、近世後期の江戸語についても、すぐに不定のカが広がったわけではなく、洒落本ではゾがカの使用を上回っていることが指摘されている（川瀬二〇二一）。

そこで、カ・ゾ・ヤラなどによる不定用法の例が、中世末から近世・近代にかけてどのように見られるかを『日本語歴史コーパス』を用いて調査した⁽¹⁾。調査は、コーパスで「品詞」が「代名詞」

表1：不定用法の助詞の種類

	洒落本					
	狂言	近松	上方	江戸	人情	明治
カ	0	0	13	14	33	14
ゾ	41	50	67	25	32	9
ヤラ	26	23	32	13	5	3
その他	2	7	8	1	0	0

1である。⁽³⁾

ここで名詞的な性質を持つと認定した構文的な基準としては、格助詞や係助詞が後続していること（用例⑤）、動詞の項になり格助詞の省略を想定できること（「裸名詞」用例⑥）、他の名詞（波線部）と共指示関係にあること（用例⑦）の三つがある。それぞれの基準で使われるカ（aの例）、ゾ（bの例）、ヤラ（cの例）、「その他」（dの例）の例を挙げる。

(5) 格助詞・係助詞が後接

- a 金「ナニしらねへことがあるものか。だれかにおそわつて御存じだらう。（人情・仮名文章娘節用）
- b 花夕「ハイけふはどこぞへと存じましたれど、何やかや用がつかへまして（洒落・誰が面影）

「形状詞—一般」「連体詞」「副詞」「名詞—数詞」とされているものの中から疑問詞のもののみを目で見て抽出し、その抽出した用例をさらに分類するという方法を取った。これは後でカの不定用法を直接疑問文や間接疑問文で使われるカと比較するためである。こうして集めた不定用法のうち、典型的に「不定」を表す名詞的性質を持つ例（副詞的性質を持つ例の問題点は四節の議論を参照）を、使われる助詞と資料によって分類したのが表

- c 口中のしよりくしたる雀鮓。それで蓼穂のどこやらがひり、とするとぞ答へける。（近松・今宮の心中）

(6) 裸名詞

- a オ「もしちよつとおみ、を、トなにかさ、やく。大「エ、すかんトおさへつけていふ。（洒落・色深猿睡夢）
- b 事の外くたびれた、なんぞたべてくたびれがなをしたひよ。（狂言・節分）
- c ハイ御免下さりませ。仏「コリヤ三介。関の戸に誰やら案内があるぞ。（洒落・花街寿々女）
- d 立つてはふすべ、居ては譏り。何がな見出さう、聞き出さう、目に角立てる仁王顔。（近松・卯月紅葉）

(7) 名詞との共指示

- a ウウくうれしい心いきだ。トなにからうかをすてぜりふをいひくきたる。（洒落・仕懸文庫）
- b かみいれより何かつ、みしものをいだして「マアこれだなんぞ不自由なものを置いて。（人情・春色梅児与美）
- c 汝ハ何者なれば、ゑんまわうがはなのさきへ、何やらねばひ物をさしつくるぞ（狂言・餌差）
- d ハア何、じゃ軽いものじゃが菓子共見へず。フムンなんぞ有ふな。（洒落・南遊記）
- 表1を見ると、室町末期の口頭語を映したとされる「虎明本狂言集」や近世前期の「近松浄瑠璃」にはカの不定用法が見られず、ゾが最も多く用いられ、ヤラもその半数ほど用いられているのが

わかる。しかし、資料が江戸（洒落本）に移って以降、ヤラは「人情本」「明治初期口語資料」と顕著に減少していく。また、ゾもカの不定用法が出現する「上方洒落本」以降にその差が縮まっていき、明治期にはカが優勢になることがわかる。

このように、近世前期以前は不定用法がカではなくゾやヤラによって表されていたとすると、カの不定用法が選言用法に大きく遅れたのは、このような不定のゾやヤラがあったためという見方も成り立ちそうに思われる。

しかし、そのような他の形式の存在は、不定のカが劣勢であったことは説明できても、不定用法がなかったことは説明できない。なぜなら、ある意味や用法にいくつかの形式が併用されることは普通に見られることからである。実際「虎明本狂言集」や「近松浄瑠璃」のデータを見ても、ゾの不定用法があるにもかかわらず、ヤラや「その他」で不定を表すことは可能になっている。また、カも「上方洒落本」で不定の用法が現れるが、そのためにはゾの不定用法が消滅している必要はなく、「上方洒落本」のデータから形骸化している必要もないことがわかる。よって、カの変化に引き連鎖（体系の欠を補うための変化）のような説明も成り立たない。

引き連鎖による用法変化の説明が成り立たなければ、カの不定用法の成立は、カの性質の変化自体にその理由を求める必要がある。そもそも「言葉の変化」には次の二つの異なった含意があるが、

(8) a ある意味・用法 a を表す語形が A から B へ交替する

b ある語形 A の持つ意味・用法が a から β へ移行する

(8a) の語形の交替は A よりも B が優勢であるといった社会言語学的な関心を惹くが、(8b) の移行のプロセスを直接説明するようなものではない。ところが、不定のゾやヤラに言及する、不定用法の歴史についての研究は、ある意味・用法を表すための形式がどのようにに交替したかに着眼するものが多い。⁽⁴⁾ 次節では、このような研究の欠を補うべく、カという形式の持つ性質の変化に着目し、同じ「不定」を表すにもかかわらず不定用法が選言用法から遅れた要因を考える。

三 疑問文の変化との相関

衣畑・岩田（二〇一〇）では、カの不定用法の成立は、疑問文で使われるカが疑問詞を取れるようになったことによるとしている。以下の本節の主張に重なるところが大きいので、当該論文から重要な箇所を引用しておく。

どのようにしてカが疑問詞を取ることができるようになったのだろうか。…不定のカは、まず副詞的な例が一八世紀ごろに現れ、その後名詞の例が現れていることが分かる。この時期には間接疑問文においてもカが疑問詞を取る例が現れている。さらに、我々の調査では、史記抄、毛詩抄、虎明本狂言集など中世の文献で、文末のカ（引用者注…直接疑問文の）が疑問詞を取った例は見られなかったが、近世に入ると…文

末の力が疑問詞を取る例が見られる。：よって力の不定の成立は、選言からの変化ではなく、このような疑問の力が疑問詞を取れるようになったことによって、成立したものと考えられる。(一一頁)

本稿でも、力の不定用法は疑問文で力が疑問詞を取れるようになったことから成立したと考える。ただし、衣畑・岩田(二〇一〇)では「選言」と「不定」が同じ意味を持っているとは明示的に述べていないため、疑問文から不定用法への影響がどのようなものかがはっきりしていない。本稿の観点からは、意味的な「不定」はすでに選言用法によって力に獲得されているため、力が不定用法を獲得する下地はすでにできていることになる。あとは、力が形態統語的に、疑問詞を嫌わないという性質に変われば不定用法が成立する。さらに、衣畑・岩田(二〇一〇)では不定用法への影響に関して間接疑問文と直接疑問文の両方を挙げているが、本稿が新たに提示する以下のデータからは、直接疑問文からの影響と考えた方がよいことが示される。

表2は、中世末から近代の、力による不定用法の用例数の推移と、力を持つ疑問詞疑問文(間接/直接)の用例数の推移を示したものである。疑問詞疑問文の用例の収集方法は前節で述べた不定用法のそれと基本的に同様のものであるが、分類の方法など詳しくは衣畑(二〇二二)を参照されたい。文献は表1と同様なので、不定用法の「名詞的」な例の用例数は、表1の力の用例数と一致する。これに加え、表2には副詞的な例と「その他」とした

例の用例数も挙げた。⁽⁵⁾

表2の結果を見ると、不定用法は衣畑・岩田(二〇一〇)が指摘するように副詞的な例が名詞的な例に先行して現れている⁽⁶⁾。また、その副詞的な不定用法が多く現れる「近松浄瑠璃」で、疑問詞を持つ間接疑問文・直接疑問文も現れていることがわかる。中世末期の「虎明本狂言集」では、どの用法でも力が疑問詞を取るものが稀である。直接疑問文の四例のうち二例は衣畑(二〇二二)が指摘するように係り結びの残存など疑いが残るものであり、直接疑問文の文末で力が使われている確例とは言えない。よって、近世に入り、直接疑問文で力が疑問詞疑問文に使われる例が多くなり、そのために、力が徐々に疑問詞に対する免疫を失い、不定の用法が副詞的なものから名詞的なものへ発達していったと見ることができ⁽⁷⁾。

力が疑問詞を取る例が増えた「近松浄瑠璃」においてはまだ間接疑問文の例は多くない。用例数の上から見ると、力による不定用法の成立に影響を与えたのは直接疑問文の方だろう。しかし、これは用例数の上からのみ言えることではない。近松浄瑠璃の不定用法と見られる例を具に検討してみると、そこには直接疑問文からの影響を読み取ることができる。次節をその分析に当てる。

表2：疑問詞を取る力の分類

	狂言	近松	上方	江戸	人情	明治
間接疑問文	0	5	4	12	33	25
直接疑問文	4	27	14	15	47	38
不定用法	副詞的	1	14	8	31	61
	名詞的	0	0	13	14	33
	その他	0	1	3	10	25

四 近松浄瑠璃の不定用法

『日本語歴史コーパス』には江戸時代前期、元禄期の資料として、新編日本古典文学全集「近松門左衛門集」の世話浄瑠璃が収められている。近松の世話浄瑠璃は、これまでも日本語史の資料として、二段活用的一段化、アスペクト形式の発達、多様な敬語法などが見られることが指摘されてきたが、力による不定用法の成立でも、近世に新たに起こった変化の過程を示している点で興味深い。

本調査では「近松浄瑠璃」に不定用法と見られそうな例が一五例見られた。以下この一五例について力の取る疑問詞の種類に分けてその解釈を見て行くが、その前に、文語の係り結びの残存として表2から除いた三例について触れておきたい。

- (9) a ふたたびこの娑婆へ、いつかこうづの日親様で、南無妙法蓮華経（丹波与作）

b 誰か親子三人に仇する者はなけれども、親に逆らひ、宝を費やし、（夕霧阿波鳴渡）

c エ、口惜しや。何代かこの家に小言のあつた例もなし。（心中二枚絵草紙）

これらは全て「二度と（＝いつの日も）娑婆へは来ない」「誰も仇にするものはない」「いつの代も小言はない」のように、疑問詞は全称（全て）で解釈され、述語が否定的になっている。通常、不定用法は存在量化（xが一つ存在する）で解釈され、否定がある

場合には存在量化詞が否定よりも広い解釈になり（「誰か来なかった」は来ない人が一人存在する）、全称的な解釈（全ての人が来なかった）にはならない。よってこれらは不定の「いつか」「誰か」「何代か」ではなく、反語を導く係り結びの力（の残存）であり、(9b)、(9c)は係り結びが形骸化して反語の否定が表面に現れているものだと考える。

四・一 イク（幾）

一五例中七例は疑問詞イク（幾）を取るものである。これらの例は一見不定用法のように見えるが、その解釈を考えると未だ疑問の意味を多く残しているように思われる。以下に全ての例について検討していく。

まず次の三例は一見不定用法の力に見えても、文脈から存在量化と解釈するのは自然でない例である。

- (10) a 年二十一、まる九年泊めし旅人何万人ぞ。関一宿はせばけ

れど、男女にいくたりか、友のよしみも時の花、無常の風にちり果てて馬よりほかに問ふ人もない。（丹波与作）

b 挨拶切つた、捨てたのと、幾度か聞いたれども銀まで見せての誓文、とんと心も落着いて今日から本の夫婦。（心中重井筒）

c 家富みて庄屋に並ぶ萱屋根も、内暖かに、下女並んで紡ぐ綿車。手回りもよく、幾はへか、庭に五つのたなつ物、積む蓬菜のしまだ氏平右衛門といふ大百姓。（心中宵庚申）

(10a) は九年の間に何万人という旅人を泊めた、という文脈である。そこでできた友が数人、とは解釈しにくいだろう。かなり多数の友がいたからこそ、今は誰も訪ねる人がいない、という後の文も意味を持つと言える。つまり現代語の「何人か友達がいた」とは意味するところが異なると考えられる。(10b)は徳兵衛が身請けの金を見せ、遊女フサと縁を切る誓言を妻タツに立てる場面である。前の段落では何度も何度も妻を裏切ったことが述べられる。とすると、ここも、縁を切ったと「何回か」聞いたわけではなく、何度も何度も騙されてきた(が今回は信じよう)、と解釈するのが自然だろう。(10c)は平右衛門という大百姓の家の様子である。下女が並んで糸を紡ぎ、景気も良いとある。だとすると土間に五穀の俵(「五つのたなつ物」)が「いくつか」あると考えるのはあまりにも寂しい。いくつも俵が積まれているのである。

同様の解釈は次の「生玉心中」の二例にも見られる。

- (11) a いや／＼、今までいくたびかたらされた。その心底に極まつた証拠が見たい。(生玉心中)

b この春より狼狽ゆる体を見てこの酒一献飲ませたく、いくたびか思ひ寄つたれど、いや／＼、気の定らぬ間はかへつて毒酒と、ひかへたり。(生玉心中)

(11a)は嘉平次が遊女サガと縁を切り、キハと祝言をあげると父親の五兵衛に言う場面である。五兵衛はその言葉に今までも「いくたびか」騙された、と言っているが、騙されたのは数回ではない。この前に、五兵衛は「またしてはまたしては」と嘉平次の行動を責

めている。何度も騙されたと取るのが自然だろう。しかし、五兵衛は息子の嘉平次のことが心配で、瓢箪に金を準備し嘉平次に大皿を持たせ、酒と見せかけ金を注ぐ。(11b)はその計画を春から考えていた、というのである。「何度か」考えたわけではなく、親心としては、何度も何度も考えたという意ではないか。

なぜこれらの例では現代日本語の力の不定用法のように、存在量化の解釈にならず、全称に近い解釈(「何度も」「いくつも」といった解釈)になるのだろうか。それはまだ、これらの「疑問詞+カ」に疑問文の意味が多分に残っているからではないかと思われる。たとえば、(10a)なら「宿は狭いが、男女で何人だったかなあ、友もできた」、(11a)なら「今まで、何回だったかなあ、騙された」のように直接疑問文に解釈すれば、その数が多いという読みが容易になる。

次の二例は、文脈から存在量化の解釈が不自然というわけではない。それぞれ「何組か見てきた」「何度か懐へ手をやった」というように訳すこともできる。

- (12) a 堀で男と女子と喧嘩して、浜納屋の下で組んづ転んづしてゐたを、幾はなか見てきた。扱ひになりしやら、銭を突いたも確かに見た(五十年忌歌念仏)

b ア、されども、これは武士の銀ことに急用、こ、が大事の堪忍と手を懐へ、いくたびか、とやせんかくや、しやうげ鳥鵲の背の食ひ違ふ心を知らぬ(冥途の飛脚)

ただし、(10)(11)の例から考えると、まだ直接疑問文の意味が残り、

「何組も見てきた」「何度も手をやった」という多数の意味で使われている可能性もないわけではない。

四・二 ナニ(何)

疑問詞ナニ(何)が使われている例は、程度を表すボウ(程)が付いた次の一例のみである。

(13) お年寄った舅御の臥し悩みの抱きか、へ、宮仕へは嫁の役、御用に立てば私もなんぼうか嬉しいもの。

(13) は女郎の梅川が、恋仲である忠兵衛の父を介抱する場面である。
(10) や(11)と同じく、役に立てば「幾分か」嬉しいわけではなく、大変嬉しいことを伝えているというのが自然な解釈である。

四・三 イツ(何時)

十五例中残りの七例は、疑問詞イツを取り不定的に時間を表すものである。うち四例を次に挙げる。

(14) a いつか思ひのナ、下紐解けて、昔思へば憂やつやら。(山崎与次兵衛寿の門松)

b 寝て温めし懷子、いつの間にかは浮かれ初め、三界をただ家として、(五十年忌歌念仏)

c 一つの間にかは助右衛門、戻つて後ろにあるぞとは見えずし
ら紙を押し広げ、(大経師昔暦)

d 紙問屋の仕切銀、いつからか、着類を質に間を渡し、私が
簞笥はみな空殻。(心中天の綱島)

このボタンは全て、これまで見たイク(幾)やナンボウ(何程)と異なり、「ある時点xが存在する」という存在量化の意味に解釈される。それぞれの例の解釈を示すと(15)のようになる。

(15) a ある時点xが存在し、時点xで思いが叶って、昔を思い返す
すと辛いことばかり(14a)

b ある時点xが存在し、可愛がつてきた子が時点xで広い世界に出ていつて(14b)

c ある時点xが存在し、時点xで助右衛門が後ろに立ったが、それに茂兵衛は気づかず白紙を押し広げて、(14c)

d ある時点xが存在し、時点x以降、紙問屋への支払を着物を質に入れてやりくりし、私の簞笥は空っぽ(14d)

(15) の解釈からわかるように、「いつも」のような全称量化としては解釈できず、現代日本語の不定用法の典型的な解釈がよく当てはまっていると言える。

四・四 疑問文から不定用法へ

カがイク(幾)やナンボウ(何程)を取るものは、カの不定用法に典型的な存在量化の解釈を持たない例が多く、意味的には直接疑問文に近いと考えられる。一方、イツ(何時)をカが取る例には存在量化の解釈が自然であり、その点で現代日本語のカの不定用法と変わらない。

このように「近松浄瑠璃」においてカが疑問詞を取る場合の解釈に幅が見られるのは、これらが回数、程度、時間を表して、構

文的には副詞的な位置で機能していることが関係していると考えられる。副詞的な位置で力が用いられれば、それは(5)(6)(7)のような名詞句の生起する位置とは異なり、主節の述語からは独立的で疑問文に近い解釈が得られやすいからである⁽⁹⁾。

近世に入り、力が疑問詞疑問文で使われ始めるとともに、このような副詞的な位置で疑問詞と力が生起する例が見られ、一部には存在量化の解釈も認められる。このような例を通して、それまで疑問詞を取れなかった「不定」の力(＝選言用法の力)が、疑問詞が取れるように形態統語的に再分析され、名詞句の位置にも不定用法の力が現れるようになったと考えられる⁽¹⁰⁾。

五 さいに

力による不定用法の成立についての本稿の論点をまとめると以下のようになる。

- ・ 力の不定用法は、存在量化を「不定」的に表すという点で、力の選言用法と同じ意味である(一節)。
- ・ にもかかわらず、力の不定用法は、選言用法よりも大きく遅れて一九世紀に成立した(衣畑・岩田二〇一〇)。
- ・ 力が不定用法を持つようになる前には、ゾやヤラによる不定用法があったが、他の形式(ヅ、ヤラ)が不定用法に用いられたことは、その形式(力)が不定用法に用いられなかったことを説明するには不十分である(二節)。
- ・ 力は近世に入って、直接疑問文で疑問詞とともに用いられ

るようになり、その影響で力の不定用法が成立した(三節)。
・ この直接疑問文からの影響は、「近松浄瑠璃」で不定用法の力が副詞的位置に偏って用いられ、解釈も全称量化から存在量化まで幅が見られることに反映されている(四節)。
力による不定用法の成立についての本稿の考えは、基本的に衣畑・岩田(二〇一〇)に重なるが、不定用法と選言用法の関係を適切に捉え直し、そこに直接疑問文の変化がどう関わるかを実証的に示した点が、新たな貢献と言える。

注

- (1) 国立国語研究所、<https://cedninja.jp/chi/>。狂言、洒落本についてはページョン2018³、それ以外はページョン2020³による。また、人情本はコアのみを、明治期は「明治初期口語資料」のみを調査した。
- (2) 疑問詞にこれら以外の品詞タグが付けられている場合はデータに含まれない。たとえば、「何者」「何事」のような疑問詞と形式名詞の複合語は「名詞―普通名詞」にタグ付けされているため、今回の調査範囲には入っていない。また、「副助詞」に分類されている語彙素「なんぞ」「なんか」には「くかなんぞ」「くかなんか」で不定用法と関連するものが若干あるが江戸時代まで「くかなんぞ」で固定されているため(衣畑・岩田二〇一〇、五節)用例数に入れない。
- (3) 係り結びと疑わしい例(四節で一部後述)は除き、洒落本の当該地域以外の話者の例は除外した。
- (4) 先に触れた此島(一九六六)、川瀬(二〇二二)以外にも、堀崎(一九九七)、川瀬(二〇一九)など。

(5) 「その他」としたものは、衣畑 岩田 (二〇一〇) で「コピーラ

が後接」「ノが後接」「スルが後接」「格助詞が前接」としたものであるが、これに加えカが属格ノの後に現れる「ど」このか番頭にかかへを仕てもらったそふだ」(洒落・総籙) のような例が四例あった。なお、引用のトがカに前接するものは同論文注二に従って用例数に入れなかった。トカの歴史については岩田 (二〇一四) が詳しい。

(6) 衣畑・岩田 (二〇一〇) では「近松浄瑠璃」に裸名詞の例を二例挙げているが(当該論文用例28)、そのうち一例は係り結びと疑われる例である(後掲9b)。もう一例は「何事が夢に見て」(鍾の権三重帷子) のように複合名詞の例であり今回の調査対象には入らなかったが、構文的に唯一裸名詞と認められるものである。

(7) なお副詞的な例は「上方洒落本」で一旦少なくなるが、また「江戸洒落本」以降増加している。その一つの要因としては「何か」が次のようなフィラーの用法を発達させることが考えられるが、この変化は一旦名詞的な不定用法の「何か」が出た後、これが様態副詞を経て談話標識へと文法化しているためで、名詞的な不定用法の成立とは別の過程であると考えられる。よってここでは取り扱わず、別の機会に議論を譲りたい。「花」「コウ伝兵へさん。成ほど隅にやアおかれね。何かコウ稚馴楽といふ勘だがどふだ。」(人情・恋の花衆)

(8) 存在量化の命題の意味は対象xが少なくとも一つ存在するという意味なので、xが複数存在しても構わない。しかし、複数存在する場合には「二つ、三つ、四つ、多数、全て」のような数量詞が使われる。よって、数量詞がないと二つ以上存在しないという含意がグライスの量の格率によって生まれ、通常は一つのみ存在するといふ解釈になる。

(9) Kinuhata and Whitman (2011) ではカの不定用法の成立について、イツによる副詞的な例も疑問文の一種と考え、主節に付加され

た直接疑問文から不定用法が発達したことをより積極的に主張している。しかし、本稿では意味的な「不定」はすでに選言によって力に成立したものと考え、疑問文との関係についてはあくまで影響関係にとどまるものと考ええる。

(10) 川瀬 (二〇二一) は「上方洒落本」の不定用法のカの例が(特に文化年間以降の)地の文に偏ることからカが規範性を帯びていたことを指摘している。地の文については「江戸洒落本」でも「人情本」でもゾが使われにくく、俗語としてのゾが嫌われたのかとも思われる。名詞的な例に限って言うと、江戸語資料の会話文であっても、ゾはカと比べても多く用いられるので、ゾが俗語的であったことが示唆される。なお、「近松浄瑠璃」の地の文ではカ、ゾ、ヤラともに五例でゾが嫌われたわけではないが、会和文のゾの多さからすると、やはり地の文でカの割合は増えると言える。不定用法のカが地の文に入り込みやすかった要因については、さらに検討する必要がある。

参考文献

- Kinuhata, Tomohide and John Whitman (2011) "Genesis of Indefinite Pronouns in Japanese and Korean," in McClure, William and Marcel den Dikken eds, *Japanese Korean Linguistics 18*, Stanford: CSLI, pp.88-100.
- 岩田美穂 (二〇一四) 「例示並列形式としてのトカの史的变化遷」 益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編) 『日本語複文構文の研究』ひつじ書房、三三三―三四六頁
- 川瀬卓 (二〇一九) 「不定の「やら」「ぞ」「か」の東西差と歴史的推移」 金澤裕之・矢島正浩 (編) 『SP盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院、一五二―二六九頁
- 川瀬卓 (二〇二一) 「洒落本における不定の「ぞ」「やら」「か」筑紫日

- 本語研究会（編）『筑紫語学論叢Ⅲ』風間書房、一三四―一五四頁
- 衣畑智秀（二〇二二）「日本語疑問文の歴史変化―近世以降の疑問詞疑問文を中心に―」『日本語の研究』第一八巻一号、近刊
- 衣畑智秀・岩田美穂（二〇二〇）「名詞句位置のカの歴史―選言・不定用法を中心に―」『日本語の研究』第六巻四号、一―一五頁
- 此島正年（一九六六）『国語助詞の研究―助詞史の素描―』桜楓社
- 堀崎葉子（一九九七）「江戸語の不定表現に用いられるカ・ゾ・ヤラ」『青山語文』第二七巻、一四四―一五四頁
- 湯澤幸吉郎（一九五五）『室町時代言語の研究』風間書房
- 湯澤幸吉郎（一九六二）『徳川時代言語の研究』風間書房

（きぬはた・ともひで 福岡大学）